

レーニンの「労働貴族」論

富 沢 賢 治

I 問題の所在

マルクス主義理論によれば、資本主義の発展ともなつて階級闘争が激化するはずである。ところが、実際の歴史のうえではイギリスをはじめとする先進資本主義諸国において階級闘争はむしろ逆の方向を示してきた。レーニンは、この問題を帝国主義と日和見主義との関連の問題として把握し、それを彼の帝国主義論体系の不可欠の構成部分として理論化した。この理論は一般に「労働貴族」論とよばれる¹⁾。「労働貴族」論をめぐる最近の論争を整理するとつぎのように分類しうる。(1)マルクス主義批判の立場から、「労働貴族」論を主として政治史・社会史の面から検討し、それが歴史の実証的検証に耐えられるものではなく、作為的な理論にすぎないと主張する見解²⁾。(2)「労働貴族」論を主として経済史の面から検討し、「労働貴族」の経済的基礎を植民地搾取にあるとみるかぎり、それは経済史的事実に反するとする見解³⁾。(3)「労働貴族」論は、19世紀後半のイギリスには適合するとしても、帝国主義段階の一般理論とするには無理があり、改良主義発生の原因にかんするレーニンの理論としては「労働運動の

自然発生性」論と「職業別労働組合運動の経済主義」論こそマルクス主義への基本的貢献である、とする見解⁴⁾。(4)「労働貴族」論の現代帝国主義諸国への直接的適用可能性を主張する見解⁵⁾。

ところで、たんにイギリスの19世紀的「労働貴族」の歴史的存在形態の実証的研究を基礎にしたり、「労働貴族」の経済的基礎を植民地搾取にだけ限定することによって、レーニンの「労働貴族」論が対象とする問題設定の全体を否定するというような議論からは、彼がせつかく提起した帝国主義と日和見主義との不可避的関連という問題が問題としてそっくりすりぬけてしまうことになる。逆に、レーニンの「労働貴族」論の現代への直接的適合性を主張することは、「労働貴族」論のもつ時代的制約性を軽視しすぎることになるし、また、その適合性を19世紀後半のイギリス社会に限定することは、「労働貴族」論のもつ一般性の側面を軽視することになる。だが、このような総括的評価を下す以前に、これらの議論を概観して、まず第1に問題となる点は、それらが前提とするレーニンの「労働貴族」論なるものが種々異なっているということである。その原因の一つは、それらが自己の議論に都合のよい個々の文献だけに依拠するために、レーニンの「労働貴族」論の全体像を十分に把握していない点にある。したがって論争の現段階においては、できるだけ広い範囲の文献に依拠し、レーニンの「労働貴族」論の

1) 労働貴族の概念およびそれにかんする議論の歴史については、H. Pelling, *Popular Politics and Society in Late Victorian Britain*, 1968, pp. 37 ff. および M. Nicolaus, "The Theory of the Labor Aristocracy", *Monthly Review*, 21-11 (April, 1970), pp. 92 ff. 参照。

2) H. Seton-Watson, *The Pattern of Communist Revolution*, 1953, p. 341. H. Pelling, "The Concept of the Labour Aristocracy" in *Popular Politics and Society*, 参照。

3) H. B. Davis, "Imperialism and Labor: An Analysis of Marxian Views," *Science and Society*, 26-1 (winter 1962). M. Barratt Brown, *After Imperialism*, 1963, 参照。

4) E. J. Hobsbawm, "The Labour Aristocracy in Nineteenth-century Britain" and "Trends in the British Labour Movement since 1850" in his *Labouring Men, Studies in the History of Labour*, 1964. do., "Lenin and the 'Aristocracy of Labour'" *Monthly Review*, 21-11 (April, 1970), 参照。

5) M. Nicolaus, op. cit. 佐藤保「帝国主義と『労働貴族』」, 『唯物史観』9号(1970), 参照。

内容を充分くみあげ、それを彼の帝国主義論体系のなかに正しく位置づけるという作業があらためて必要となる。この作業はまた、上記の諸議論の前提とする「労働貴族」論が有するいくつかの誤りをおのずから明らかにすることにもなる。本論文はそのための一つの試みである。

II 帝国主義論体系における「労働貴族」論の位置

まず第1にレーニンの帝国主義論体系における「労働貴族」論の位置づけを明らかにしておこう。すでに別稿で指摘したように、レーニンの帝国主義概念をただ経済的概念としてだけ把握することは正しくない⁶⁾。それは経済的・政治的・歴史的概念であり、彼の帝国主義論体系は、帝国主義の経済的分析を基礎に、さらにその政治的分析にすすみ、最後にその歴史的限界性を結論づけるという3部構成のプランをもつものであった。以下、若干の論拠をあげよう。

まず第1に、『帝国主義論ノート』のなかで帝国主義の定義についてレーニンが書いた

定義 { { 経済的
 { 反動
 { 民族的抑圧
 { 併合
 { 政治的

というメモは、帝国主義の定義が政治的内容をも含まねばならないことを示し、さらにそれに続いて「帝国主義=資本主義」と書き、その内容を「α独占的」、「β寄生的」、「γ死滅しつつある」と説明しているメモは、彼が帝国主義の定義としてこれら3つの特殊性を含むものを考えていたことを示している⁷⁾。

第2に、『帝国主義論』の序文(1917年)は、この著作が「もっぱら理論的な——とくに経済的な——分析」にかざられていることを記し、日和見

主義の問題と帝国主義の死滅性の問題についてはとくに他の諸論文の参照を求めている⁸⁾。

第3に、レーニンは、『帝国主義論』第7章で周知の5つの基本的標識からなる帝国主義の定義をあたえた直後に、とくにつぎのような注意をしている。「もし基本的な純経済的概念(前述の定義はこれにかざられているが)だけでなく、資本主義のこの段階が資本主義一般にたいしてもつ歴史的地位、あるいは労働運動における二つの基本的傾向と帝国主義との関係をも考慮に入れるなら、帝国主義はこれとは別様に定義することができるし、また定義しなければならない⁹⁾。」この文章は、帝国主義の十全な定義のためには、日和見主義的傾向と反日和見主義的傾向という「労働運動における二つの基本的傾向と帝国主義との関係」の問題と帝国主義の「歴史的地位」の問題とを考慮に入れることを要求している。

第4に、「労働運動における二つの基本的傾向と帝国主義との関係」をとくに考慮して『帝国主義論』の直後に書かれた論文「帝国主義と社会主義の分裂」における帝国主義の定義¹⁰⁾が『帝国主義論』における定義を補完している。そこでレーニンはまず、「帝国主義とは、資本主義の特殊な歴史的段階である」と規定しておいて、つぎにこの「特殊な」という意味内容を説明する。彼によれば、「この特殊性は3とおりでである。すなわち、帝国主義とは、(1)独占資本主義、(2)寄生的な、または腐敗しつつある資本主義、(3)死滅しつつある資本主義、である。」これら3つの特殊性のうち帝国主義の根本的特徴であり、その本質をなすものは第1の特殊性であり、この「独占主義」は、(1)独占的資本家団体、(2)大銀行の独占的地位、(3)トラストと金融寡頭制とによる原料資源の占取、(4)国際的カルテルによる世界の経済的分割(資本輸出がこの分割と密接にむすびつく)、(5)世界の地域的分割(植民地)の終了、という5つの主要な「姿態」をとって現われる、とされる。つぎに第2の特殊性についても、(1)独占の特徴

6) 拙稿「レーニンのイギリス労働運動論」(一)、『一橋論叢』63-3(1970)、31-33ページ、参照。なおレーニンの帝国主義概念を考察し、私と同趣旨の結論を析出した最近の論文としては小島恒久「帝国主義の概念——日本資本主義論争との関連において——」、『唯物史観』9号、参照。

7) 『レーニン全集』大月書店、第39巻、729ページ。

8) 全集、22巻、215ページ、参照。

9) 同上、308ページ。

10) 全集、23巻、112-4ページ、参照。

である腐敗の傾向、(2)金利生活者層の増大、(3)自乗された寄生性としての資本輸出、(4)政治的反動、収賄、買収、疑獄、(5)他民族搾取(「文明」世界の寄生化と「帝国主義的大国のプロレタリアートの特権的な層」の寄生化)、という5つの特徴があげられる。最後に第3の特殊性については、レーニンは、「帝国主義が死滅しつつある資本主義、社会主義へ移行しつつある資本主義である」という理由は、明らかである。資本主義から生じる独占は、すでに資本主義の死滅であり、資本主義から社会主義への移行のはじまりである。帝国主義による労働の大がかりな社会化……も、やはりこのことを意味する」と述べるにとどめている。

以上の論拠によって明らかのように、『帝国主義論』に依拠してよく帝国主義の5つの指標と言われるものは、実は帝国主義全体にかんする指標ではなく、そのうちの第1の特殊性である独占資本主義にかんする指標と解されなくてはならない。なるほど独占資本主義が帝国主義の根本的特徴であり、その本質をなすものであることを軽視することは許されないが、だからといって帝国主義の一つの特殊性だけを重視するあまり、他の二つの特殊性とのあいだの論理的関連を見失ってしまったのでは、帝国主義の全体像を正しく把握することはできない。独占の分析を基礎に、さらに帝国主義の寄生性・腐朽および死滅性をも視野におさめなければ、十全な帝国主義批判はなされえない。独占という資本の論理の分析とともに、寄生性・腐朽(とくにその労働運動への反映としての日和見主義)の本質を究明することによってはじめて帝国主義の死滅性の論理も明らかにされることになるのである。

レーニンは、『帝国主義論』の最終章で全体の総括をおこない、「帝国主義と労働運動における日和見主義との結びつきの事実」をとくに強調して、「帝国主義との闘争は、それが日和見主義にたいする闘争と不可分に結合されないなら、一つの空虚な虚偽の空文句にすぎない」と主張しているが、それは『帝国主義論』全体の分析をふまえて析出された一つの重要な結論であったと言えよう¹¹⁾。レーニンの帝国主義観からすれば、資本に

たいする反独占闘争は労働運動内における反日和見主義闘争と結びつかなくてはならない必然性を有するのである。こうして、われわれは、日和見主義の問題が、帝国主義論体系のなかで、独占の問題とならんで重要な位置を占めていると結論するのである。

では、「労働貴族」論はこの日和見主義論のなかでどのような位置を占めているのであろうか。この問題を考察するさいに、すでに引用した帝国主義の死滅性にかんするレーニンの発言が一つの示唆をあたえる。すなわち彼は、「資本主義の死滅」の契機として、「資本主義から生じる独占」とならんで「帝国主義による労働の大がかりな社会化」をあげている。これら2契機のうち、前者についての研究に比較すると、後者については、それがどのような意味で「資本主義の死滅」の契機となるのかはもちろん、その概念自体の内容もまだ十分な検討を経ていないと言えよう。「帝国主義による労働の大がかりな社会化」という概念が、資本主義一般に共通な協業と分業を基礎とする工場制機械工業の発展に伴う労働の社会化を意味すると同時に、帝国主義段階に特有な「生産の集積を基礎とする独占」、金融寡頭制、国家独占資本主義、等による労働の社会化の一層の発展を意味することは言うまでもない。しかしながら、この概念はこのような意味での、いわば生産力視点からみた労働の社会化の量的拡大を意味するだけではないように思われる。生産関係視点からみた場合は、独占が社会主義への移行にとっての否定的契機となるのと同様に、帝国主義による労働の社会化もまた否定的契機と解されねばならない。社会主義的生産の基盤となりうるためには、独占と同様に、帝国主義による労働の社会化もまた否定的媒介を必要とするのである。このような意味での労働の社会化を考察し、それがどのように社会主義への移行の肯定的契機に転化しうるかという問題を解明することなしには、レーニンの提起した問題視点から十分に現代帝国主義批判を展開することはできないであろう。すなわち、帝国主

11) 全集, 22巻, 349ページ。

義による労働の社会化という問題を「自由競争から独占へ」という資本の論理の問題と表裏一体の関係をなすものとして把握する視点が必要なのである。

では、否定的契機としての「帝国主義による労働の社会化」とはなにか。帝国主義による労働の社会化という問題を、帝国主義段階に特有な生産関係視点からみると、そこには、独占資本家を中心とするブルジョワジーによる労働運動の体制化という意味での「労働の社会化」という問題が内包されているように思われる。この問題にかんしてレーニンはこう説明している。独占の獲得する「帝国主義的超過利潤」は小ブルジョワジーと労働者階級との一定層を買収する経済的可能性を生みだす。帝国主義段階においては「労働貴族の層のブルジョワジー側への経済的離脱は成熟し完了し」、その政治的現象形態としての「ブルジョワ的労働者党」は「すべての帝国主義にとって不可避的であり、典型的」となる¹²⁾。買収された層は「労働運動の内部におけるブルジョワジーの真の手先、資本家階級の労働担当副官、改良主義と排外主義の真の伝達者」として機能することによって、「ブルジョワジーの主要な社会的支柱」となる¹³⁾。レーニンはこのように帝国主義による労働の社会化にとって上記の社会層の果たす役割を決定的なものとして位置づける。彼の「労働貴族」論が対象とするのはこのような社会層の発生と役割の問題である。こうしてわれわれは、「労働貴族」論がレーニンの日和見主義論のなかで要の位置を占めていると結論しうるのである。

そこで、レーニンの帝国主義論体系を完成させるために残されている第1の課題は、『帝国主義論』の序文の指示にしたがって、『帝国主義論』以外の諸文献をも参照しつつ、帝国主義と日和見主義との関連という問題を、とくに「労働貴族」論を核心としつつ、さらに究明していくことになる。以下、上記の社会層の発生と役割を中心にレ

12) 「帝国主義と社会主義の分裂」, 全集, 23巻, 124-5ページ。

13) 『帝国主義論』独仏版序文, 全集, 22巻, 223ページ。

ーニンの「労働貴族」論の内容を考察することにしてしよう。

III 「労働貴族」発生 of 政治的要因

すでに別稿で指摘したように¹⁴⁾, レーニンは、「労働貴族」の発生要因として、「政治的自由」と「資本主義の内包的および外延的發展にとって、他国にくらべて異常に有利な条件」とをあげている¹⁵⁾。そして、前者はブルジョワジーにとって「労働貴族」の必要性を生みだす要因、後者は「労働貴族」の実現を経済的に可能にする要因、と解されうる。

では、「政治的自由」はどのようにして「労働貴族」の必要性を生みだすのか。

レーニンによれば、資本主義社会における政治的自由主義すなわち「政治的権利を發展させる方向へ、改良、譲歩、等々の方向へ、歩みをすすめる方法」は、本質的にはプロレタリアートにたいするブルジョワジーの一統治方式であり、この政治的自由主義をブルジョワジーに強制するのは、資本主義的生産様式そのものに特有な諸条件である。この意味で、政治的自由主義もまた経済的自由主義と表裏一体の関係にあると言える。レーニンはこう述べている。「正常な資本主義社会は、代議制度をかためずには、住民がある程度の政治的権利をもたないでは、首尾よく發展することはできないし、この住民は、『文化』の点で比較的高い要求をもっていることを特徴としないわけにはいかない。このようなある最小限の文化性にたいする要求は、高度の技術、複雑性、弾力性、活動性、世界的競争の急速な發展、等々を伴う資本主義的生産様式そのものの諸条件によって生みだされる¹⁶⁾。」資本主義社会における政治的自由の本質とその発生基盤がこのようなものであるかぎり、それは本来矛盾にみちた存在でしかありえな

14) 前掲拙稿(三), 『一橋論叢』64-1(1970), 38-9ページ, 参照。

15) 「アメリカの事情」, 全集, 36巻, 233ページ, および「論集『マルクス主義と解党主義』の結び」, 全集, 20巻, 282ページ, 参照。

16) 「ヨーロッパの労働運動における意見の相違」, 全集, 16巻, 367-8ページ。

い。プロレタリアートの統治を真の目的とするはずの自由主義方式も、その独自の法則により、プロレタリアートの政治的権利を拡大せざるをえず、そうすることによってブルジョワは自らの政治的基盤を掘りくずすことになる。とすれば、彼らは、自らの政治支配体制を維持するために、プロレタリアートの政治的権利の拡大がブルジョワの政治的基盤を危くしないような安全弁を自らの機構のうちにくみこむ必要をもつ。ブルジョワは、自由主義方式を形式的にだけ発展させ、プロレタリアートの政治的権利の拡大というその実質面を空洞化させることによって、プロレタリアート統治というその真の目的の実現をはかろうとする。プロレタリアートの政治的権利の形式的拡大と実質的空洞化というこのプロセスに、まさに「労働貴族」が重要な役割を演ずることになる。ブルジョワは、「労働貴族」をプロレタリアートの形式的代表者として政治に参加させることにより、プロレタリアート一般の実質的政治参加を拒否しうる。このさい「労働貴族」はまさに「資本家階級の労働担当副官」の役割を果たし、ブルジョワの政治機構がうまく機能するための安全弁となる。「政治的自由」が「労働貴族」を必要とする理由がここに見いだされる。

上記のことがらはいわば資本主義社会一般における政治的自由主義の矛盾として説明されるが、それは帝国主義段階においてはどのような特質を有することになるのであろうか。レーニンによれば、帝国主義段階においては自由競争が独占に転化するように、政治的自由主義は「政治的反動」に転化する。しかし、独占が自由競争をまったく排除するものではなく、自由競争という基盤があってはじめて成立するように、「反動」もまたいぜんとして政治的自由主義をその成立基盤とする。そして、そのために矛盾は一層激化する。すなわち、「反動」はまずなによりも国家機構の異常な強化として現われるが、それは一方では、軍隊・警察・官僚という抑圧機構の強化を意味すると同時に、他方では、「ブルジョワ国家のうちでもっとも完成し、もっとも進歩した」国家形態としての「議会主義的民主的共和制」への進行を意味す

る¹⁷⁾。このような議会主義的民主制の進展が、世界再分割のための帝国主義諸国間の闘争の激化とともに、「労働貴族」買収の志向をますます強化させる。帝国主義的ブルジョワは、国家の抑圧機構をとおしてプロレタリアートの実質的政治参加を拘束する一方、他方では「買収」という手段をますます多く用いるようになる。労働運動の上層を買収して、それを内部から墮落させることがいまや「20世紀の労働運動にたいする全世界のブルジョワ全体の政策」となる¹⁸⁾。こうして、帝国主義段階においては、「軍国主義の増大¹⁹⁾」による「軍事的支柱」の増強とともに、日和見主義の増大による「ブルジョワの主要な社会的支柱」の増強がとくに必要とされる²⁰⁾。この政治的必要性が帝国主義的超過利潤という経済的可能性に裏付けられたとき、「ブルジョワ的労働者党」が必然化する。こうしてレーニンは、「『ブルジョワ的労働者党』は、すべての帝国主義にとって不可避的であり、典型的」となる、と結論する²¹⁾。

では、この「ブルジョワ的労働者党」はどのような社会層をその基盤としているのであろうか。それは、一般的には、「帝国主義的超過利潤によって買収されて、資本主義の番犬に、労働運動腐敗化の実行者に変わった一部の小ブルジョワと労働者階級の若干の層²²⁾」という表現にみられるように、小ブルジョワをも含む社会層であり、

17) 「わが国の革命におけるプロレタリアートの任務」, 全集, 24巻, 51ページ。なおこの問題にかんするレーニンの見解のより詳細な考察は前掲拙稿(六), 『一橋論叢』64-4(1970), 21-2ページ, 参照。

18) 全集, 21巻, 89, 367, 445, 459ページ, 参照。

19) 「社会主義革命と民族自決権」, 全集, 20巻, 165ページ。

20) 一方(右)の側における軍国主義の増大と他方(左)の側における日和見主義の増大とがともに帝国主義の特質として把握されている点に注意。

21) 「帝国主義と社会主義の分裂」, 全集, 23巻, 124ページ。なお「ブルジョワ的労働者党」の形成、活動内容およびその基盤としての「組合主義的政治」については、前掲拙稿(二), 『一橋論叢』(63-5), 33-5ページ, (三)50-3ページ, (四), 『一橋論叢』(64-2), 48-52, 55ページ, (六)33ページ, 参照。

22) 「帝国主義と社会主義の分裂」, 全集, 23巻, 117ページ。

より具体的には、「国会議員、ジャーナリスト、労働運動の役員、特権的な職員、プロレタリアートの若干の層からなるまとまった社会層」である²³⁾。レーニンのいわゆる「労働貴族」論が問題としているのがこのような社会層であり、たんに19世紀的な「熟練高給労働者」という意味でのいわば狭義の「労働貴族」だけではないことがここで確認される必要がある。

しかもこの社会層がさらに「特権民族」という基盤をもつところに、レーニンの「労働貴族」論の特徴がある。彼は、搾取階級と被搾取階級という概念との対応関係において、「搾取民族」と「隷属民族」、あるいは、「特権民族」と「被抑圧民族」という概念を用いている²⁴⁾。レーニンは、「帝国主義的大国のプロレタリアートの特権的な層は、いくぶんは、幾億人の非文明民族の費用で生活している」と、プロレタリアートの特権層について述べるだけではなく、「広範な植民地政策がとられた結果、ヨーロッパのプロレタリアは、社会全体がプロレタリアの労働によってではなく、ほとんど奴隷化された植民地原住民の労働によって養われるという状態にある程度おちいったのである」と、プロレタリアートを含めた民族全体の特権をも問題としている²⁵⁾。レーニンによれば「社会全体を養っているプロレタリア階級だけが社会

革命を行う力をもっている」という命題に加えて、さらに帝国主義諸国が分裂しているという事実が、「自国の住民の非常に大きな部分を…帝国主義的獲物の分けまえにあずかせている国々で、深刻な革命運動の発生を…困難にしている」のである²⁶⁾。ここでは階級の問題が民族の問題との関連で提起されている。レーニンの「労働貴族」論の対象を狭義の「労働貴族」の問題に限定してしまう視角からは、上記のような階級と民族とのからみあいの問題がすりぬけてしまうことになるのである。

IV 「労働貴族」発生の経済的要因

「労働貴族」発生の経済的要因について考察されるべき主要な問題点は、「帝国主義的超過利潤」の源泉の問題と超過利潤分配に関連する「買収」の問題である。以下、これらの問題についてレーニンの見解を考察することにしよう。

まず第1に、上述の社会層の発生を経済的に可能ならしめる要因はなにかという問題であるが、それは、レーニンによれば、一般的には「資本主義の内包的および外延的発展にとって、他国にくらべて異常に有利な条件」であり、特殊的には帝国主義的独占を基礎とする「一定の超過利潤と…特権との総和²⁷⁾」である²⁸⁾。「帝国主義的超過利潤」とは、レーニンによれば、「正常な、全世界で通常のものとなっている資本主義的利潤をこえた余分の利潤²⁹⁾」あるいは「資本家が自国の労働

23) 「第2インタナショナルの崩壊」、全集、21巻、250ページ。この社会層の具体例として、さらにつきのような表現がみられる。「熟練高給労働者」(全集、18巻、386ページ)、「熟練工場労働者」(全集、19巻、392ページ)、「特権的な職員」、「ジャーナリスト」、「労働運動内の官僚」、「合法的な労働団体の役員、国会議員、……合法的な大衆運動のもとでよろしく安隠にやっているインテリゲンツィア、最高給をもらっている労働者の若干の層、下級事務員」、「一定の層(議会议人、官吏、……)」(以上、全集、21巻、100、155、250、366ページ)、「職長」、「労働者大臣、『労働者議員』…戦時工業委員会の労働者側委員、労働官僚、狭隘なツングの組合に組織された労働者、職員」(以上、全集、23巻、54、123ページ)、「熟練労働者の特権的な層」(全集、30巻、348ページ)。

24) 全集、13巻、69ページ；23巻、113ページ；31巻、238ページ、参照。

25) 「帝国主義と社会主義の分裂」、全集、23巻、114ページ。「シュトゥットガルトの国際社会主義者大会」全集、13巻、69ページ。

26) 「シュトゥットガルトの国際社会主義者大会」、全集、13巻、69ページ。「党綱領の改正によせて」、全集、26巻、164-5ページ。

27) 「よその旗をかかげて」、全集、21巻、145ページ。

28) なおレーニンは、国外から得られる「超過利潤」を基礎とするある帝国主義国における労働貴族の発生という一般的な問題だけではなく、さらにその国内におけるある産業部門が獲得する「独占的高利潤」に基づくその部門における労働貴族の発生というより具体的な問題についても述べている(『帝国主義論』、全集、22巻、348ページ、参照)。また、「富裕な帝国主義諸国の寄生生活」の一基礎として「後進国からきた低賃金の労働者」の搾取をあげている(「党綱領の改正によせて」、全集、26巻、164ページ)。

29) 「帝国主義と社会主義の分裂」、全集、23巻、

者から搾りあげている利潤を超過して得られるもの³⁰⁾」である。これらの定義から理解されるように、「超過利潤」の搾取の源泉はけっして植民地に限定されるものではない。それは、レーニンの別の規定によれば、「植民地領有と金融資本の超過利潤³¹⁾」であり、「植民地から、また弱小諸国の金融的搾取から生まれる³²⁾」ものである。また「特権」についても、「植民地の搾取からの所得、また世界市場での『祖国』の特権的地位からの所得の一部分のおこぼれをもらった労働貴族³³⁾」という表現から理解されるように、この場合の「特権」は、なにも植民地領有にだけ関連するものではなく、植民地領有をも含めてのうえではあるが、国際市場に占める種々の政治的・経済的な特別権益を意味する³⁴⁾。このように解するならば、「労働貴族」発生の経済的要因を植民地搾取にだけみる見解がレーニンの誤読に基づくものであることは明らかである。

植民地領有の問題自体についても注意されねばならない点がいくつかある。その第1点は、レーニンの場合、植民地概念が広義だということである。すなわち、それは、広義には、ただたんに従属植民地だけでなく、移住植民地や経済的従属国をも含む概念として用いられているのである³⁵⁾。

122 ページ。

30) 「共産主義インタナショナル第2回大会」, 全集, 31 巻, 222 ページ。

31) 「共産主義インタナショナル第2回大会の基本的任務についてのテーゼ」, 同上, 185 ページ。

32) 「ドイツ独立社会民主党の手紙にたいするロシア共産党の回答草案」, 全集, 30 巻, 348 ページ。

33) 「ロシア社会民主労働党在外支部会議」, 全集, 21 巻, 155 ページ。

34) レーニンが、帝国主義段階の特徴として、帝国主義諸国による世界の植民地的分割の完了と経済的分割の開始とを強調していることを想起すべきである(「党綱領改正資料」, 全集, 24 巻, 486—7, 496—7 ページ。「党綱領の改正によせて」, 全集, 26 巻, 158—163 ページ, 参照)。

35) 移住植民地を含む概念であることについては、たとえば、「イギリスでは、その植民地領土が第1位にある。この領土は…アメリカでも非常に大きい——たとえばカナダ」(『帝国主義論』, 全集, 22 巻, 279 ページ)という文章、また、経済的従属国をも問題としていることについては、たとえば、「経済的『併合』

注意すべき第2点は、レーニンが植民地搾取の方法を資本輸出だけに限定してはいないということである。「植民地ではその住民は……無数の方法(資本の輸出, 利権その他, 商品販売のさいのごまかし, 『支配』民族の権力機関への屈従, 等々)で搾取されている³⁶⁾」という文章にも明らかのように、レーニンは、植民地搾取の方法が多様であることを強調している。これらの点を考慮に入れれば、従属植民地への資本輸出だけを問題として、レーニンの「労働貴族」論の経済史的不適合性を主張することがいかに正しくないかはますます明らかとなろう。

つぎに「帝国主義的超過利潤」の分配の問題を考察しよう。レーニンは、帝国主義国のブルジョワジーによる「買収」の経済的可能性を強調し、「超過利潤」が現実にとどのように分配されるかということとは「第2義的な問題」であるとして、この問題については多くを語っていない³⁷⁾。しかし、レーニンが「買収」を問題とするとき、個人の主観的な行為を問題とするのではなく、社会的、客観的な意味における「買収」を問題としていることは、ここでまず第1に指摘しておく必要がある。彼はこう述べている。「戦前には、もっとも富んだ三国、イギリス、フランス、ドイツは他の収入を計算にいれなくて、資本の対外輸出だけから、一年間に80—100億フランの収入をえていると考えられていた。このだいたいな金額のなかから、労働者の首領や労働貴族に施し物をし、

は、政治的な併合がなくとも完全に『実現可能』であり、またたえず見うけられることである。帝国主義についての文献には、たとえば、アルゼンティンは事実上イギリスの『貿易植民地』であり、ポルトガルは事実上イギリスの『属国』であるなどという言葉が、いたるところに見うけられる。これは、ほんとうである」(「マルクス主義の戯画と『帝国主義的経済主義』とについて」, 全集, 23 巻, 40 ページ)という文章を参照。レーニンによれば、「帝国主義のもとでは、資本は古い国々へも輸出されはじめ、しかも、超過利潤だけがその目的ではない」(「党綱領の改正によせて」, 全集, 26 巻, 161 ページ)のである。

36) 『社会主義と戦争』, 全集, 21 巻, 308 ページ。

37) 「帝国主義と社会主義の分裂」, 全集, 23 巻, 123 ページ。

ありとあらゆる買収をするために、五億ぐらいを投げださうすることは、もちろんである。すべての問題をおしつめていくと買収ということになる。これは、もっとも大きな中心都市で文化をたかめ、教育機関をつくり、協同組合の指導者や労働組合の指導者や議会の指導者のために何千もの役職をもうけるといったふうな数かぎりなく多様な方法によってやられている。だが、これは現代の文明的な資本主義的諸関係のあるところではどこでもやられている³⁸⁾。」ここにみられるように、問題とされているのは、教育機関、労働組合、議会等の種々の社会機構をつうじての「買収」、社会的・客観的な意味での「買収」である。

第2に、レーニンによれば、「買収」は経済的「買収」だけに限定されるものではない。たとえば、「ブルジョワ的労働者党」の形成過程にかんして彼は、「改良主義的で愛国主義的な職員や労働者のための経済的特権や施し物に対応する政治的特権や施し物を、最新の資本主義の政治的諸施設——新聞、議会、組合、会議、等々——がつくりだしている」と述べ、「ブルジョワ的労働者党」の代表者や支持者になるように誘惑したり、報賞したりする手段として、「内閣または戦時工業委員会、議会や各種の委員会、『堅実な』合法新聞の編集局や、それにおとらず堅実で『ブルジョワ的に従順な』労働者団体の指導部の……地位」などをあげている³⁹⁾。このような「政治的特権や施し物」の授与もまた「買収」の一種と把握されているのである。

第3に、レーニンによれば、「買収」の対象は、一定の社会層に限定されるものではなく、種々の社会層を対象に、種々の方法でなされる。たとえば、レーニンの例示によれば、民主主義の制度のもとでは、「労働者になんでもすきな改良と福利をあたえようという……四方八方にふりまかれる約束の、多岐にわたる制度を系統的に実施し、し

っかり整備することなしには、大衆をついてこさせることはできない」ので、ブルジョワジーは、「ブルジョワ的労働者政党」などを媒介にして、必要な場合には、「従順な労働者のために社会改良の形で(保険その他)かなりの施し物をとってやる」こともするのである⁴⁰⁾。

以上の例示によって明らかのように、レーニンが問題としているのは、「買収」の個人的行為ではなく、「おしつめていくと買収ということになる」という客観的な意味での「買収」であり、さらに一般的には、それを生みだす社会機構のことなのである。

V 結論と残された課題

本論文でわれわれは、レーニンの「労働貴族」論を彼の体系のなかに位置づけることによって、それがただたんに「労働貴族」という特殊な社会層の現象形態を問題とするだけのものではなく、その基礎に、帝国主義と日和見主義との必然的関連という、帝国主義研究にとって不可欠の理論的問題が存在することを明らかにし、さらにその「労働貴族」論の内容を考察することによって、「労働貴族」論をたんに19世紀的「労働貴族」像の問題に矮小化したり、植民地問題にだけ関連づけて解釈することが、いかに正しくないかということを示した。

本論文は、「労働貴族」のいわば an sich な解明を試みたものであり、つぎの段階としては、「労働貴族」のいわば für sich な解明、すなわち、革命的労働者大衆との対比における「労働貴族」の解明がなされなければならない。そうすることによって始めて、われわれは、レーニンが帝国主義段階の労働運動の歴史法則としてあげた「二つの傾向の闘争⁴¹⁾」という問題の解明に立ち向かうことができるのである。

(一橋大学経済研究所)

38) 「共産主義インタナショナル第2回大会」, 全集, 31巻, 223ページ。

39) 「帝国主義と社会主義の分裂」, 全集, 23巻, 125ページ。

40) 同上ページ。

41) 同上, 124ページ。